

(様式3号)

学位論文の要旨

氏名 植木谷 俊之

〔題名〕

Efficacy of Contrast-enhanced Harmonic Endoscopic Ultrasonography in the Diagnosis of Pancreatic Ductal Carcinoma

(造影超音波内視鏡の膵管癌診断における有用性)

〔要旨〕

背景：膵管癌 (Ductal carcinoma ; DC) と他の膵腫瘍との鑑別は困難なことがある。本検討の目的は、DC診断における造影超音波内視鏡 Contrast-enhanced harmonic endoscopic ultrasonography ; CEH-EUS) の有用性について評価することである。

方法：当院で2009年10月から2012年7月までに、CEH-EUSを施行した膵充実性腫瘍性病変のうち病理組織学的診断が得られた49症例を対象とした。EUS (B-mode) では、腫瘍の Inner echo、Distribution、Borderについて評価した。CEH-EUSでは、腫瘍の造影パターンを、造影剤投与開始後30-50秒 (早期相) と70-90秒 (後期相) において評価した。EUS (B-mode) とCEH-EUSにおけるDC診断の感度、特異度、正診率、陽性適中率、陰性適中率を算出した。

結果：最終診断は、DC (37例)、Mass forming pancreatitis ; MFP (6例)、Endocrine neoplasm ; EN (3例)、Solid pseudopapillary neoplasm ; SPN (1例)、Metastatic carcinoma ; MC (1例)、Acinar cell carcinoma ; ACC (1例)であった。EUS (B-mode) で Inner echoがHypoechoicを示す腫瘍をDCとした場合のDC診断の感度/特異度/正診率は、89.2%/16.7%/71.4%であった。CEH-EUSでHypovascularを示した腫瘍をDCとした場合、早期相は73.0%/91.7%/77.6%、後期相は83.8%/91.7%/85.7%であった。

結論：CEH-EUSはEUS (B-mode) よりDC診断能が高く、特に後期相がDC診断に有用であった。

作成要領

1. 要旨は、日本語で800字以内、1枚でまとめること。
2. 題名は、和訳を括弧書きで記載すること。

学位論文審査の結果の要旨

医学系研究科応用分子生命科学系 (医学系)

報告番号	甲 第 1450 号	氏 名	植木谷 俊之
論文審査担当者	主査教授	山崎 隆弘	
	副査教授	田邊 剛	
	副査教授	坂井 功	
学位論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。) Efficacy of Contrast-enhanced Harmonic Endoscopic Ultrasonography in the Diagnosis of Pancreatic Ductal Carcinoma (造影超音波内視鏡の膵管癌診断における有用性)			
学位論文の関連論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。) Efficacy of Contrast-enhanced Harmonic Endoscopic Ultrasonography in the Diagnosis of Pancreatic Ductal Carcinoma (造影超音波内視鏡の膵管癌診断における有用性)			
掲載雑誌名 The Saudi Journal of Gastroenterology 第 卷 第 号 P. ~ (2016年 掲載予定)			
(論文審査の要旨) 超音波内視鏡 (Endoscopic ultrasonography ; EUS) は、膵腫瘍描出能が優れており、膵疾患精査で重要な画像診断法である。近年、超音波造影剤の登場で、造影超音波内視鏡 (Contrast enhanced harmonic-EUS; CEH-EUS) が可能となり、腫瘍の微細な血流動態を観察できるようになった。膵管癌診断における CEH-EUS の有用性について評価した。 対象症例は、山口大学医学部附属病院で2009年10月から2012年7月までに、CEH-EUS を施行した膵充実性腫瘍性病変のうち、病理組織学的診断が得られた49症例を対象とした。最終診断は、膵管癌(37例)、腫瘍形成性膵炎(6例)、内分泌腫瘍(3例)、Solid pseudopapillary neoplasm; SPN(1例)、転移性膵癌(腎細胞癌)(1例)、腺房細胞癌(1例)であった。EUS (B mode) では、腫瘍の内部エコー、分布エコー、辺縁について評価した。CEH-EUS では、腫瘍の造影パターンを、造影剤投与開始後30-50秒(早期相)と70-90秒(後期相)において評価した。EUS (B-mode) と CEH-EUS の膵管癌診断能を比較し、CEH-EUS の有用性について評価した。 EUS (B-mode) で内部エコーが低エコーを示した腫瘍を膵管癌とした場合、膵管癌診断の感度/特異度/正診率は、89.2%/16.7%/71.4%であった。また、分布エコーでは、不均一を示した腫瘍を膵管癌とした場合、59.5%/33.3%/53.1%であった。辺縁が不整を示した腫瘍を膵管癌とした場合、40.5%/83.3%/51.0%であった。CEH-EUS では、Hypovascular を示した腫瘍を膵管癌とした場合、早期相は73.0%/91.7%/77.6%、後期相は83.8%/91.7%/85.7%であった。 CEH-EUS は、EUS (B-mode) より膵管癌診断能が高く、特に後期相において有用であることが示唆された。			
本研究は、膵管癌診断に対する CEH-EUS の有用性を示唆しており、膵疾患の画像診断能の向上が期待できる意義のある論文である。よって、学位論文として価値あるものであると認められた。			

備考 審査の要旨は800字以内とすること。